

新刊紹介

黒崎裕康『哈爾濱松浦洋行序説—満洲で成功した日本商社の軌跡』

井村 哲郎

1. はじめに

本書は、1910年から満洲国が崩壊した1945年までの間哈爾浜で貿易商、百貨店を経営した松浦洋行について、史資料を可能な限り涉猟して明らかにした、586ページにおよぶ大著、労作である。書名には「序説」とされているが、本書は全体として、横浜にあった松浦貿易店、そして、当初その支店であった哈爾浜の松浦商会=松浦洋行とその関連会社の「全史」と言うべきであろう。

中山道柏原宿（現在、滋賀県米原市）に江戸時代から続くモグサ屋に生まれた松浦吉松は、京都祇園で外国商館への商品販売を行い、その後横浜に松浦貿易店を開業し、羽二重、絹織物、生糸の輸出を行った。日露戦争直後の1906年には松浦貿易店はウラジオストックに支店を開設し、ロシアへの絹織物、雑貨の卸小売をめざした。しかし1909年のウラジオストック自由貿易港の廃止とそれにともなう高率關稅賦課を受けて、当時ウラジオストックにあった日本人貿易商はほとんど閉店し、松浦貿易店もウラジオストック支店を閉じ、1910年哈爾浜に支店を開設し、松浦商会と称した。

1898年に満洲里から哈爾浜を経由して綏芬河にいたる中東鉄道建設が開始された際に、哈爾浜はその中心として都市建設が行われたため、次第にロシア人の移住が進んだ。中東鉄道が建設された後、哈爾浜には中東鉄道管理局がおかれ、ロシア人、ユダヤ人が多数移住し、ロシアの極東経営のための政治的・経済的中心都市のひとつとなっていました。また中東鉄道南部線によって大連と結ばれため、哈爾浜はさらに発展した。日露戦争の結果、長春・大連間の鉄道は日本が獲得したが、その後もロシアにとってウラジオストックとヨーロッパ・ロシアとの結節点として、哈爾浜の重要性はさらに増していった。

松浦商会は、都市建設開始から12年後に哈爾浜に進出し、1912年にはモスクワに支店を開設して、ロシアへの日本商品の輸出を行った。しかし、ロシア革命の影響を受けて1917年モスクワ支店を閉鎖し、その後は哈爾浜と北満での経営に力を注いだ。1920年には哈爾浜きっての繁華街であったキタイスカヤ街（現在の中央大街）のホテル・モデルンの筋向かいに鉄筋コンクリート5階建てのビルを新築した（このビルは現在教育書店が使用している）⁽¹⁾。当初は個人商店であり、松浦商会と称したが、1928年松浦洋行と改称し、満洲国設立後の1935年には資本金30万円の株式会社松浦洋行に改組された。松浦貿易店、松浦商会、松浦洋行の歴史の詳細については、本書第18章の松浦洋行年表を参照されたい。

時期は下るが、満洲国期の哈爾浜には百貨店がいくつもあった。本書が対象としている松浦洋行の他に、秋林公司、同記商場、登喜和百貨店、丸商などである。1942

年現在でも人口 71 万人余であった哈爾浜市内にデパートがこれだけ多く存在したのは、初期の哈爾浜がロシア、ソ連の極東経営の中心都市の一つとなっていたこと、そして満洲国期には、奉天（瀋陽）、新京（長春）、関東州の大連とともに、日本の満洲経営の中核都市であったためであり、消費都市であったためである。もっとも現代とは異なり、比較的規模の小さなデパートが主であったことも事実である。

上記のデパートのうち、秋林公司はロシア人チューリンが設立した企業である。ロシア革命以前にはロシア極東最大の企業であったが、ロシア革命後国有化され、哈爾浜でのデパート経営に専念したことによって生き延びた企業である。1939 年の時点での資本金は 462 万 4000 円、哈爾浜最大であると同時に満洲国最大のデパートであった。合名会社秋林洋行（資本金哈大洋 553 万 7000 元）を擁して、卸小売、宝石、貴金属、食料品、煙草、紅茶などの販売を行い、さらにさまざまな商品を製造販売していた⁽²⁾。なお、秋林公司は経営主体を変えて、現在も存続している⁽³⁾。また、同記商場は中国人実業家武百祥によって 1927 年に設立されたデパートであり、1937 年 6 月同記商場株式会社として再組織された際には、資本金は 100 万円、百貨店を兼営し、貨物売買を行っていた。また、資本金 50 万円の丸商は 1936 年 11 月に開業している。登喜和百貨店は哈爾浜在住日本人によって 1937 年 11 月設立され、資本金は 50 万円、この時期の代表者は島田運一である⁽⁴⁾。満洲国の政治経済情勢が次第に安定し、北満開発が活発になった時期に、あるいは隆盛を迎える、また新たに創業されたのである。

時期はかなり後の 1941 年のデータであるが、『満洲事業会社成績分析 康徳八年度』によると、満洲国全体の百貨店では、新京に本店のあった東亜三中井が公称資本金 500 万円で最大であったが、払込資本金は 175 万円であった。また東亜三中井は南京など大陸各地に営業所をおいており、満洲国内だけで営業していたわけではなく、また哈爾浜には店舗はなかった。したがって、哈爾浜では、そして満洲国内では秋林が最大の百貨店であった⁽⁵⁾。別の資料によると、1942 年度決算では、秋林の利益金は 164 万 9000 円、第 2 位が登喜和で 192 万円、東亜三中井が 190 万 7000 円、次いで同記商場が 160 万 5000 円であり、丸正は 23 万 3 千円とされている⁽⁶⁾。この資料には松浦洋行はあげられていない。なお、京城に本店をおき、新京駅に近い日本橋通で百貨店を経営していた株式会社三中井（東亜三中井の親会社）も滋賀県彦根市出身の近江商人であった⁽⁷⁾。この点では松浦洋行の発祥と共通点を有する。

2. 本書の概要

本書は、「本論」にあたる部分と資料篇からなっている。著者自身も記しているように、哈爾浜に関する系統的、あるいはまとまった日本語資料はさほど多くない。このため、松浦商会、松浦洋行の経営に関する記述は少ない。しかし、キタイスカヤ街に偉容を誇った松浦ビルの建設とその建物に関する記述は詳細を究めたものであり、この点を明らかにしたことが本書の最大の功績であろう。また、資料篇には、各種会社年鑑などによる松浦洋行の営業状態、支店網、現在の建物などに関する資料が、関係者からの聞き取りも含めて多数、収録されている。今後これらを補完する資料が発

見される可能性もあるが、これらの記事・記録を越える資料を今後編纂することは困難であろう。

大部であり本書の要約は難しいため、「本論」各章のタイトルを掲げる。第1章「創業者松浦吉松の生家と生立ち」では、中山道柏原宿に生まれた松浦吉松の生家の歴史と生い立ちを明らかにする。第2章「横浜への進出と松浦貿易店」は、京都で松浦吉松が外国人相手に商売を営んだ後、横浜に進出して松浦貿易店を創業したこと、そしてその営業活動に触れる。第3章「ウラジオストックそして哈爾濱へ」、第4章「哈爾濱・松浦商会の創業年次」、第5章「哈爾濱・松浦商会の創業位置」では、日露戦争後のウラジオストック支店松浦商店の開設と、ウラジオストック自由港の閉鎖にともなう哈爾濱での支店創業、その開業年次と支店の場所を明らかにする。これまで哈爾濱での松浦商会の創業年次、場所が誤って伝えられており、それらを正した章である。第6章「横浜・松浦商会の挫折と救済」は、第一次世界大戦後の反動恐慌とロシア革命のためロシアへの輸出代金が回収不能に陥った横浜財界の苦境とそれへの対処を記す。そこでは松浦吉松など横浜財界の尽力で日露実業株式会社が創設され、それによる政治的救済が行われたこと、さらに日露実業の経営状況を検討している。

第7章「哈爾濱・松浦商会の経営改革」は、ロシア革命以降ソ連での営業が不可能になったために、哈爾濱の外国人（おもに白系ロシア人、ユダヤ人）を相手とする小売に加えて、哈爾濱を拠点として北満において商業活動を展開するようになったこと、その経営体制の改革を明らかにする。なお、本章では、満洲国期の松浦商会の経営にも触れている。第8章「松浦ビルの用地取得から竣工まで」は、借地権の取得、建築年代の検討、建築当時の経済状況、新築工事の進捗、建築概要をまとめた。第9章「松浦ビルの設計者の考察」では、これまで不明であった松浦ビルの設計者が當時哈爾濱で活躍していた建築家ミヤスコフスキイであったことを推測をはじめて考証する。次いで第10章「松浦ビルの建築様式」では、パロック様式が松浦ビルの建物外観にどのように表現されているのかを記す。第11章「松浦ビルの建築面積と建築規則」、第12章「松浦ビルの各部と建築規則」では、当時の建築規則とビルの建築面積、外観、各階の面積などの関係を記す。第13章「松浦ビルの建築資金の調達方法の可能性」では、1920年に竣工した松浦ビルの建築資金はどのように調達されたかを検討する。まず、鉄筋コンクリート5階建ての松浦ビルの建築費を30万円程度であったと推定し、その資金調達について、1. 「私札」の発行、2. 両替業による可能性、3. 借地権の担保差入の可能性、4. 日露実業株式会社からの資金調達の可能性、5. 朝鮮銀行からの借入の可能性、6. 横浜正金銀行からの借入の可能性、について詳細に検討し、結論として、東洋拓殖、日露実業、朝鮮銀行からの借入の可能性が強いと結論づける。また本章の最後では、哈爾濱松浦商会を実質的に担った水上多喜雄が、哈爾濱の特務機関を通じて哈爾濱経済の中核に食い込んでいったこと、それには松浦商店の元店員であり、その後特務機関の仕事を手伝い、またオーケストラ経営などを行った原善一郎が大きな役割を果たしたと推測し、松浦商会=松浦洋行が、関東軍の駐屯部隊、満洲国軍、満鉄哈爾濱鉄路局（のちの鉄道総局哈爾濱鉄道局）などの指定業者、御用達と

なったことを特記している。これまでほとんど知られていなかった松浦商会が「私帖」発行や両替商経営も行っていたことも記している。

第14章「松浦ビルの使用状況」では、1、2階が小売り、3階が事務所・卸部、4階は居住あるいは貸事務所、5階は宿舎であったとして、現在も教育書店においてこうした使用状況が継承されていることを明らかにする。第15章「敗戦後の松浦企業各社の行方」は、横浜の松浦貿易店、大阪・京都の松浦商会のその後をまず明らかにする。次いで、戦後の松浦洋行ビルが外文書店、新華書店、そして教育書店と代わったことを記す。あわせて戦後の松浦洋行元幹部の動向を記している。第16章「松浦ビルとロシア居留民会」は、松浦ビルがまず1909年にロシア居留民会の建物として建設されたとされる通説が間違いであることを明らかにし、またロシア居留民会にあたる組織は1935年にはじめて設立された、白系ロシア人居留民の組織「哈爾浜蘇聯居留民会」であることを記す。第17章「松浦一族の係累と各社の概要」は松浦家一族の概要を記し、また松浦貿易店の関係企業について、創業、名称、解散年月日、営業、資本金、株数、従業員数、取引銀行、組織、取扱品目などを記している。第18章「松浦洋行年表」、第19章「松浦洋行経営者の系図年表」をもって「本論」は終わる。

資料篇は、1. 創業者松浦吉松の生家資料、2. 松浦吉松資料、3. 横浜・松浦貿易店資料、4. 水上多喜雄及び俊比古の資料集成、5. 哈爾浜・松浦洋行資料、6. 教育書店建築概要、7. 日露実業（株）資料、の7項からなり、最後に参考文献と索引を付す。資料篇は、史料、手記、聞き取り、地図、写真、図面などからなっており、資料篇自体興味深く、本書の価値を高めている。

2. 結び——本書が明らかにしていること

本書は、松浦貿易店、松浦商会=松浦洋行の創始者である松浦吉松の生家から説き起こし、松浦洋行が存在した時期の哈爾浜経済について詳細に述べていることが特色であろう。とりわけ、第7章から第13章の記述は充実したものである。たとえば、ビル建設資金の調達方法を扱った第13章では、想定しうる資金調達方法を列挙して、それぞれの資金調達先と考えられる企業の当時の経営状態も含めて検討している。また、松浦ビルについては、著者自身による実地調査のデータ、哈爾浜工業大学、教育書店の档案などを利用してその外観と内部構造を明らかにしている。

しかし、このように周辺状況を縦横に論じたことによって、逆に松浦洋行という哈爾浜に存在した企業の歴史に十分収斂しきれていないところがあり、このため読みにくく、経緯を追いにくいところがあるのが欠点であろう。また、「松浦洋行序説」という書名から判断する限りさほど必要ではないと考えられる叙述も見られる。とはいえ、これらの叙述も、書名をしばらく離れて、その主題に沿って読み進めると、それ自体は大変興味深い論述であることも事実である。

なお、第9章で松浦ビルの設計者をミャスコフスキイであることを明らかにした際にメリホフ説を援用して、メリホフの説は「豊富なロシア語文献を基にしている」から「信頼性は抜群である」とされている。それまで先行研究に言及する際には厳しい

吟味を行って来たのに対して、ここでメリホフの論証が何故に正しいのかを充分検討していない点が惜しまれる。また、構成上の問題であるが、「第7章哈爾浜・松浦商会の経営改革」の後半は、満洲国期を対象としており、それ以降第8章以下の章とは、扱われている時期が逆転しており、読み進めた際に異和を感じた。また、先行研究を批判する際に、ときにポレミークすぎることも気になるところである。そして、最後にある参考文献の排列は「不同」とされている。規則的に配列されていないために、本文に付された注の文献を探そうとする際には不便である。

本書は、哈爾浜のメインストリート、中央大街に戦前約35年間貿易商社、百貨店、小売・卸売商として存在し、また関東軍や特務機関と結んで活発に活動した松浦洋行の歴史を明らかにしただけでなく、松浦洋行の活動を通して、国際都市哈爾浜を巡って展開された中国、ロシア＝ソ連、日本の複雑な経済関係の一端を明らかにしたという点で、哈爾浜の日本企業に関するこれまでにない優れた著作であり、今後の哈爾浜における日本人と日本企業の活動の研究の深化にとって役立つものとなろう。

本書は9月15日に刊行されたばかりであり、短時日の間に本紹介を執筆したため、十分に読みこなせてはいないのではないかという危惧を持つ。著者の意図とは異なる判断を下した箇所もありうるかもしれないが、そうした点はご海容いただきたい。

註

- (1)これまで松浦商会ビルの建設は1909年の哈爾浜での操業開始と同時とされることが多かったが、本書は、それは間違いであり、1920年の完成であることを仔細に論証している。私自身もこれまでの説にしたがって、「哈爾浜・秋林公司小史」(『環日本海研究年報』第17号、2010年)において、1909年説をそのまま使ったが、これは訂正しなければならない。
- (2)満洲事情案内所編『在満主要会社要覧』(東京、大阪、三省堂、昭和14年)67-69頁。また、井村「哈爾浜・秋林公司小史」参照。
- (3)井村「哈爾浜・秋林公司小史」参照。
- (4)「六. 会社分析表」(満洲興業銀行考查課『満洲事業会社成績分析 康徳八年度』康徳10年)。
- (5)同上資料。
- (6)満洲中央銀行資金部「満洲国会社業態分析一覧表 康徳九年度決算(自康徳九年三月至康徳十一年三月)」74頁。
- (7)「三中井を歴史にさかのばる」滋賀大学経済経営研究所インターネット企画展第1回
http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/internet_gallery.html 参照。

黒崎裕康『哈爾濱松浦洋行序説－満洲で成功した日本商社の軌跡』(586頁、地久館出版、索文社発売、2010年9月)。

(いむら てつお：新潟大学人文社会・教育科学系・フェロー)